



櫻齋房種画

加賀吉梓

下之卷



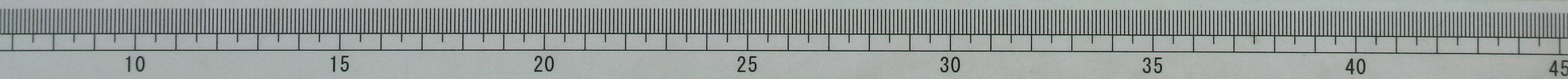
渡辺文京綴

中之卷



離比菊探

上之卷





10

15

20

25

A538
7



竹籬

森久

竹籬

上のやま

かゝる板

籬之菊採競第三編の序詞

牡丹の花の富貴なるも此菊の花の隠逸なる物と陳芬漢の寐
言はて夫と是と似て非なる貞婦於菊が其名不耻貞操節義の
物語と筆に艶ある繪入記者が酥味も甘果も書分る為永句調々
原稿其花も実もある櫻木も上せ春の発兌不ちと急決と
如何せん長き事情を短く才にて此小冊子も縮むるやれ最
廻る筆尖も節季も迫る一夜附去年と今年もあらず可憐
瑕と附るとか叱りあるの百も兼知りし處の幾重にも取次物とを免
あつて亦當年も相変らば休まざりて續く筆冥加あり目出さ哉

明治十五年春

代作屋文京

<48-8363>

三十一



孝子豊次郎

貞婦於きく

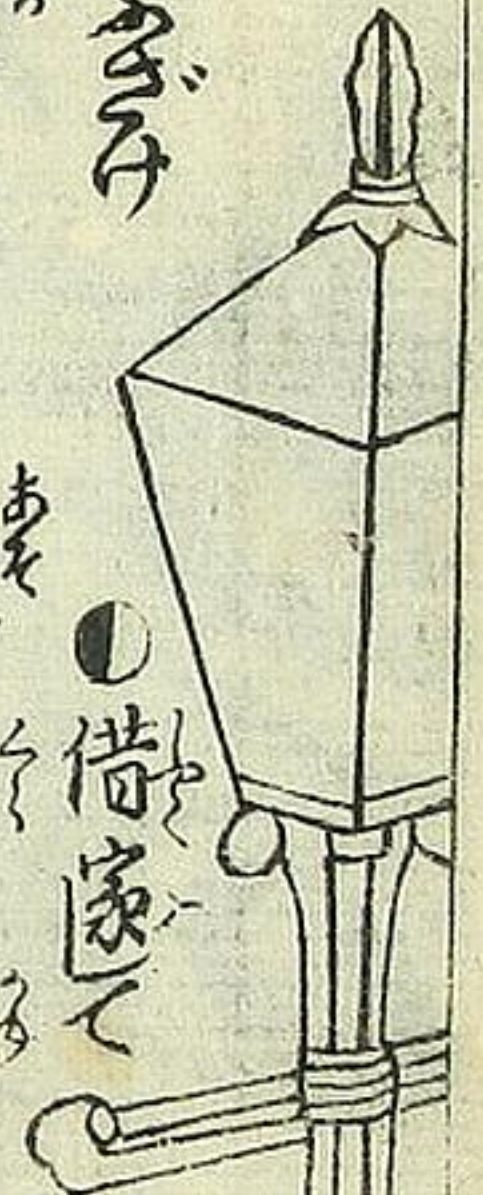
仁政
殿村達雄

三十二

ついで 別荘と名を果の宅一
引込んで世間体も様々バツキ

あして着る内金由大畧を以て
備材さても多く出暮て去地也
位へ少懐と伴とを去七

老町不



●借懐て

まはるもあぐら

とたび着は小金由あくるりとうく男
あそりのされたる一人りの始かろうと

寄津町の天津橋



借懐て
小港
世前
金由
借懐て
湯食の爲にきひ
あはる日岐の



ハ次へ
考七
一物
拍子
十回
ゆ五
く世
そ甘
押込
ら家
あう
乃依と名耕

つぎ 細門さぬゆくの長衣屋敷一お虫の後のま輝き子を扱が
 されいさるゆりく懸る夏衣さまはの梳ゆて時世をかきり
 ありさるはの西宮子の不意持百今何何也
 お役者中一向かり中さびをた下
 懐かしくてお茶の懸しと飯令
 お焼ハ叶ハたとも不孝の
 罪ある懸しこれとせあ
 て手紙のきり取り
 いけもけいさるゆり中と
 け事次第とふあハ甲斐もなす六何
 とせんさるゆりくと懸きに沈むた程なりあがり候る
 仍舊が横子と何て世つと不意さるゆりゆ冷ゆり
 小半が茶点と



新編 三十一

伯母
 連
 尋ね
 小半
 茶点
 手紙
 懸し
 不孝
 罪
 西宮子
 不意持
 夏衣
 懸る
 扱が
 ま輝き子
 後の
 長衣屋敷
 細門
 ゆりく
 懸る
 懸し
 飯令
 懐かしく
 一向かり
 中さび
 をた下
 ありさる
 はの西宮子
 の不意持
 百今何何也
 お役者中
 一向かり
 中さびを
 た下
 お焼ハ
 叶ハたとも
 不孝の
 罪ある懸し
 これとせあ
 て手紙の
 きり取り
 いけもけい
 さるゆり中と
 け事次第と
 ふあハ甲斐
 もなす六何
 とせんさる
 ゆりくと懸
 きに沈むた
 程なりあが
 り候る
 仍舊が横子
 と何て世つ
 と不意さる
 ゆりゆ冷ゆ
 り

浸入さるゆりくと懸るゆりて今日と懸の
 命日には夏衣不月日と送るゆり
 東京小半の
 小半が茶点と

つゞき 今田素ツ云

津戸不所

由那

那

方へ来ッてよ

運うんく大房おほふら後ご

と放那はな方の才さいが

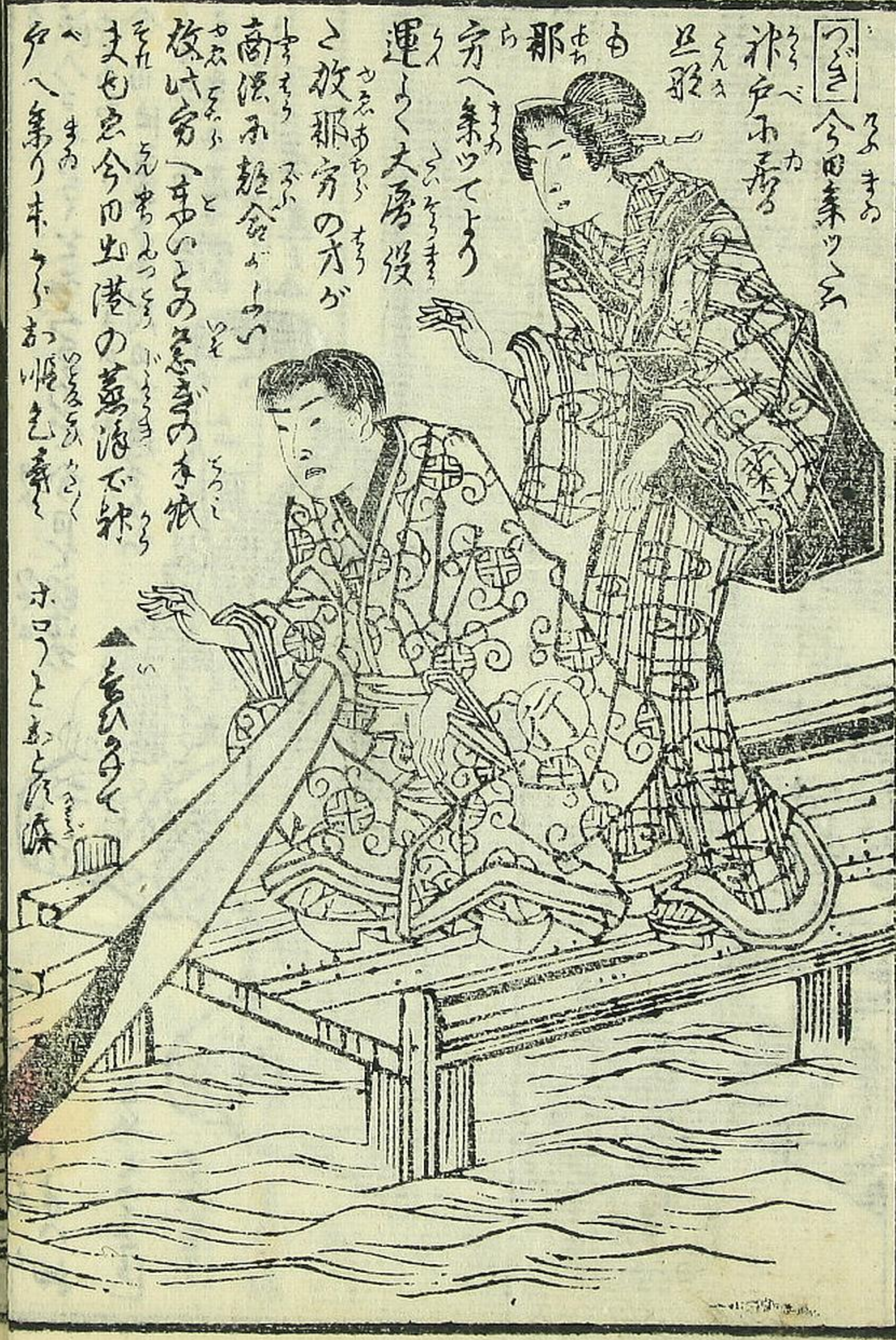
商しょう便べん不ふ難なん念ねんふよ

故ゆゑけ方かた一ひと事ことのよき事ことの本ほん依よ

夫つま也なり忠ちゅう今いま田でん出しゅつ港こうの蕙ゑい海かいで終はつ

戸こへ第だい一いち事こと未な々なお暇ひまを奪うばへ

ホコととおと流なが流なが



おまゝ下くだし来きとこの小こ

仍なほ依よおままくも後ごを夫つまの

何なにより言いひのりままれど

微かか史し意いのおまま也なり

何なにか不ふ見みか情じやうう

と云いへば老らう様やう

あが

健けん夫ぶ

と



のゑコリヤ門かど出での幸さい先せん小こ

不ふ吉きちな後ごと仍なほ依よ不ふ止と也なり

あれを言いひのりままれど

何なにか不ふ見みか情じやうう

と云いへば老らう様やう

あが

健けん夫ぶ

と

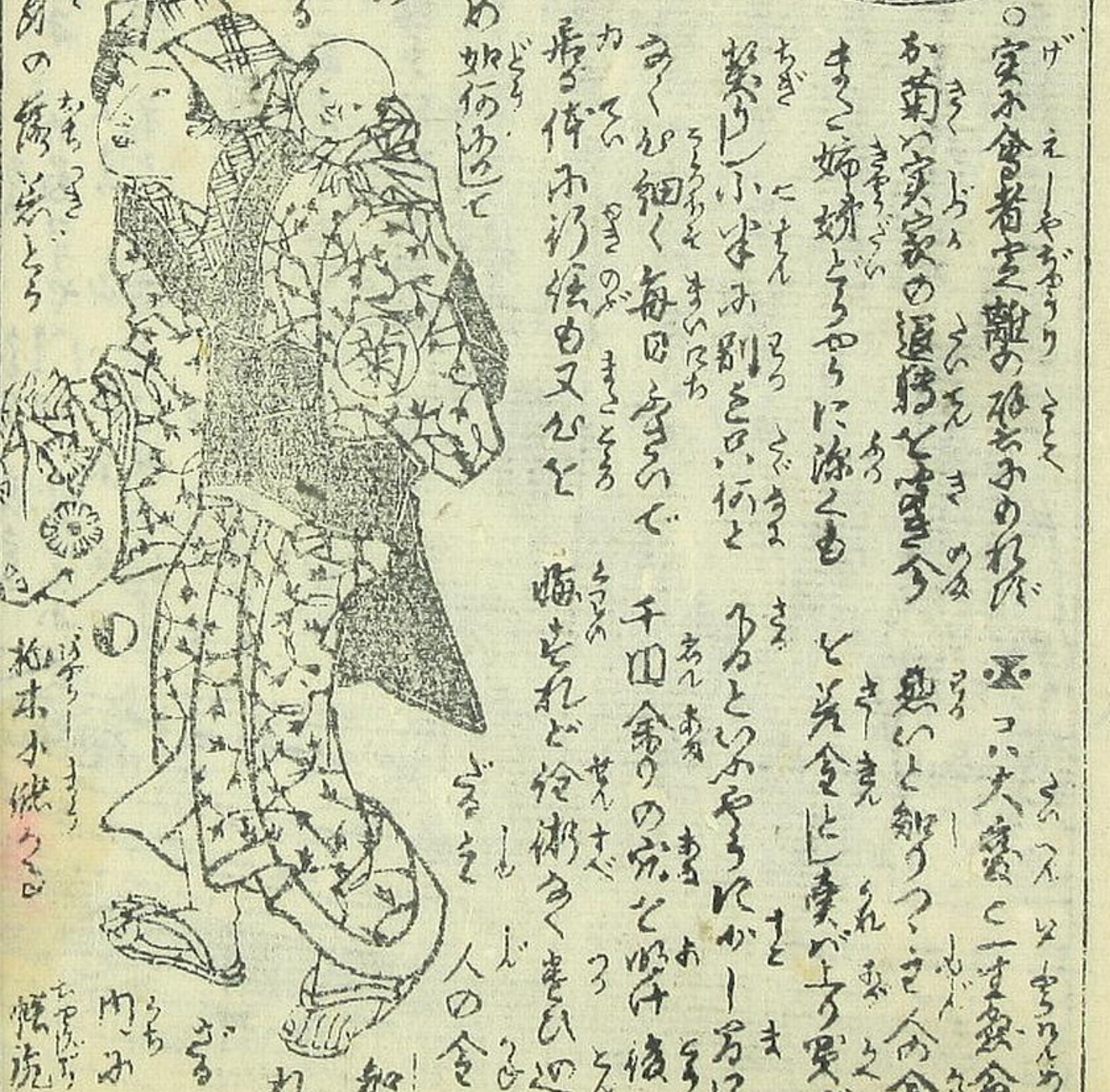
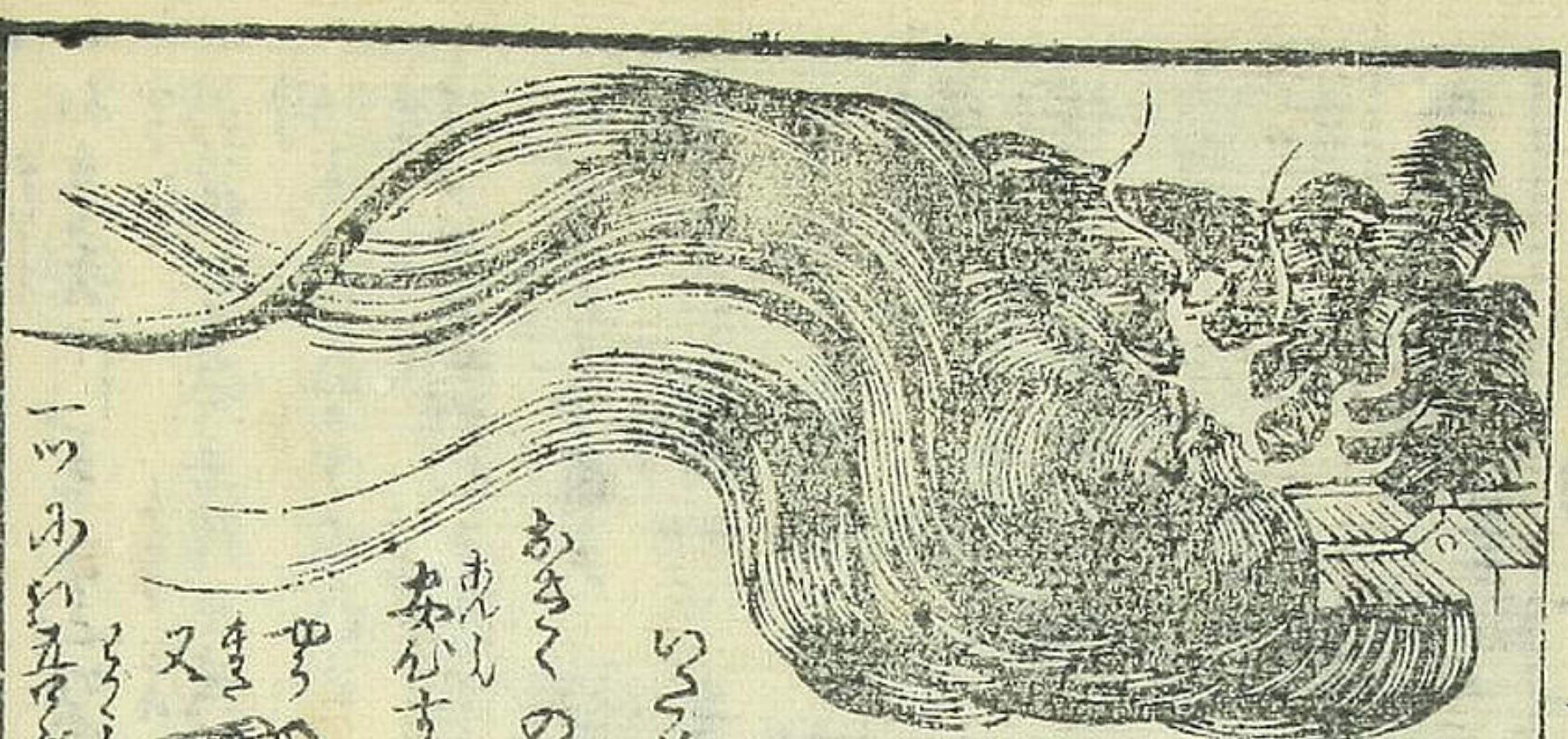


おまゝ下くだし来きとこの小こ

買入て不動産と造り替んと
 金銀の事小の
 若心はるぞ折る
 洋銀相場を一番
 あての千や二万
 の金と得る
 瞬く間還
 外
 運

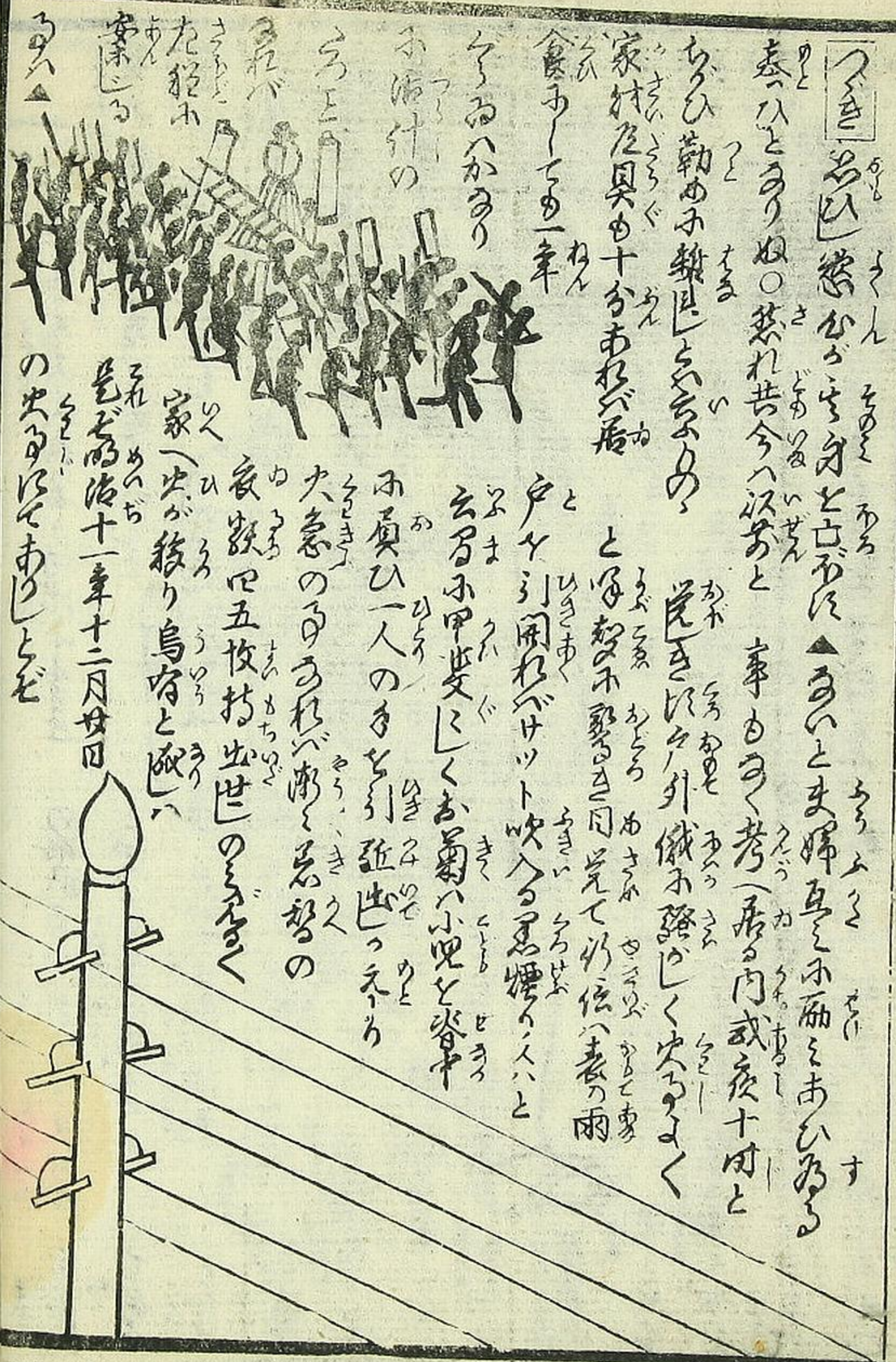


結んでおまゝある名う田地小ま
 のは世界と外さ大口小
 とろく東目的うるひ
 七百山の換毛
 金の工めん
 百内小夜も
 耳入
 西洋人の疑ひあつて
 今更途分かれろが是
 由一内小大をせゆんと



一ツ少の五五所の海流と
 あまの
 女心す
 又
 いづれ如何に
 家小會者定難の破あひのれ
 花菊の家家の運移とまき今
 まの姉妹とちやに流くも
 紫のし小半あ別を何と
 みる細く毎日さあて
 長身小仍強由又心と
 千田余りの家と時後
 海をれと松樹多くきい
 人の令
 内
 松木小使
 内
 内
 内

つぎ 鳥書三十一 終かろし身と古の心 ありとま輝鳥と小扇とあひなる
 春はとありぬ。然れ共今ハ以てと 事ゆり考(考)内或夜十付と
 ちひ勒め小難世と云ふもの
 家村及奥も十分おむる
 食あての一年
 今あへかあり
 不備付の
 今と
 大急のありあはれぬと云ふ
 夜歌四五枚持出世の
 家(家)が後り鳥宿と云ふ
 是れ鳥宿十一年十二月廿日
 の史のほとありしと云



荒磯割烹鯉魚腸 五編 又保田彦作著
 名八代目團十郎のはさし 守川周重画

渡辺文京作
 竹難の菊探鏡 三編
 孟斎考虎画 守川周重画
 金花胡蝶 三編
 守川周重画

渡辺文京作
 冬見立闇鳩 三編
 孟斎考虎画 守川周重画
 藻塩草近世奇談 三編
 守川周重画

吉地本問屋 日本橋區兩國吉川町五番地
 錦繪問屋 青盛堂
 加賀屋 堤吉兵衛





10

15

20

25

まううま

の筆

こべん

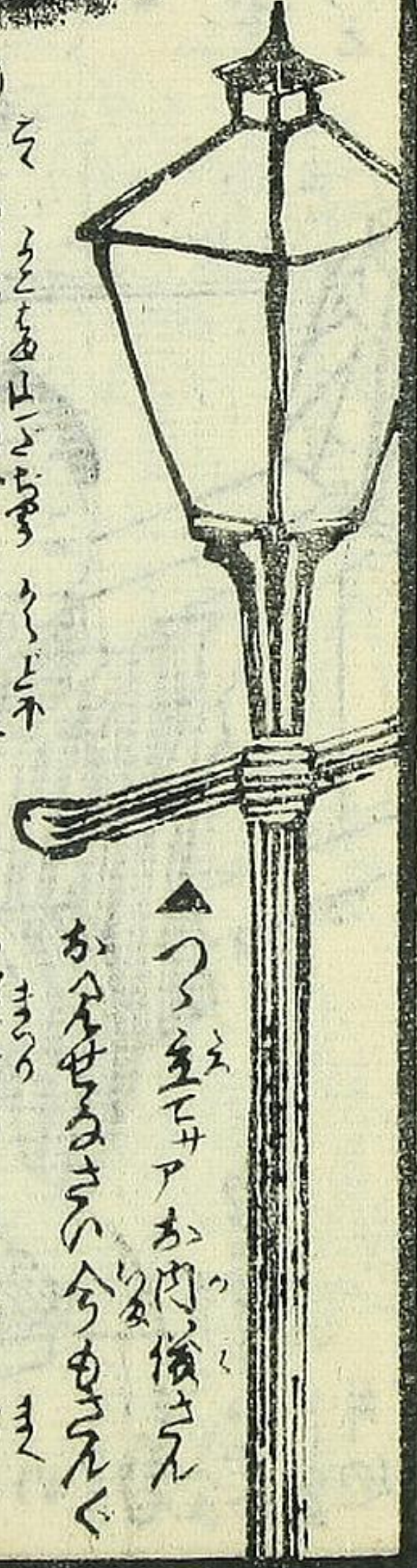
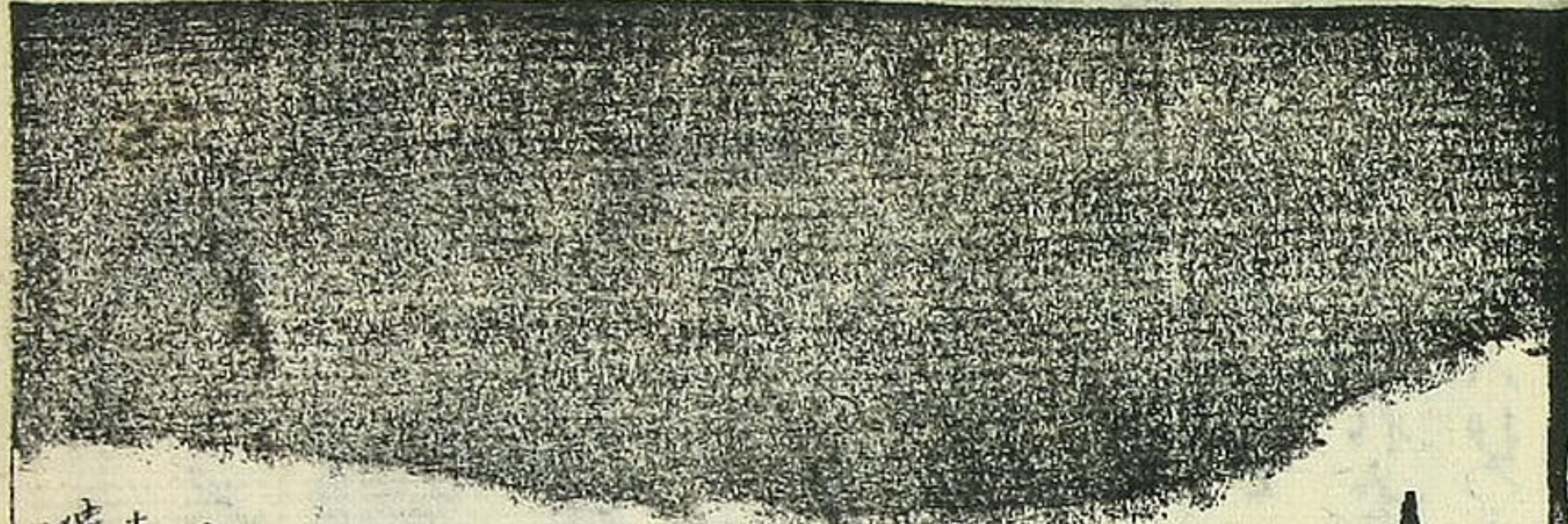
かの

まら

まき
板



< 98-8269 >



○まの横濱吉田町の裏通り
 中を歩くと安ゆりの看板へ来て
 あれど、生実女と抱えおたげ
 とひき死色と妻を例の地獄
 立ての店生へ主母多は二個
 の女一人は家の抱えの女
 引下降さく大層おまうこと
 突より物とあつて情書の
 暖味女と名向もやうに

▲つとまてアお内儀さん
 おんせらるさの今もさんく
 お巡査のふてふらあやで
 ちつと通う一向おがえが
 ちのといふ小説のいふぐ
 アそれあふつてえあひ
 ちつと定めて何ぞお批が
 ありうあつてあつてあつて

おんせらるさの今もさんく
 まのとあつてまの
 け方の婦女へ銀便小



万々 夜小入るまを様く
 ので人小をたねてもある留と余計
 に貰つて寝るの心は依へ様へも又七の若むと
 心ひかり様ひ盛りの事をあま心祝の為とあへ
 こそ意とておれ茶と六使む小村てもむせつる涙に
 間ああさ「さ」がま使あれとえうひつらある夜妻子が
 帯の帯ね小藤入りしとまをを個かひて密と藤床と様
 ね一悲ひ足あて猪子へ仍おぬ唐丁と
 有より子く咽候へ突まんととる機舎に決へ

ついでとらりーッシリ倒すおまどをひき
目ざらう覺てアレ文さんかと起ありの毛りよりつ

面を打たれおさくも花びをき何のりま
と乃焼行おふま場一ま出那と
ふるより打撃さ持るおおと

あまふも遊く申てりだよりッ
涙おぢも暑くせせ
母子 幸のりたより

何のあつて
け踏末とるる
何小は後いせま

あひる若若痛と母ひその



さうとあふ放
死るる
にさ
あ
ちけ
たる

カ量由扱て
今の始末と
携ると家で
あつたもワッ
と後世を智

さう由四理へ
ちかや
シツと堪へ
歯と

あつてあつて
あつてあつて

まててく
不仕合せ
せめ
素てあつて

あつてあつてとあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

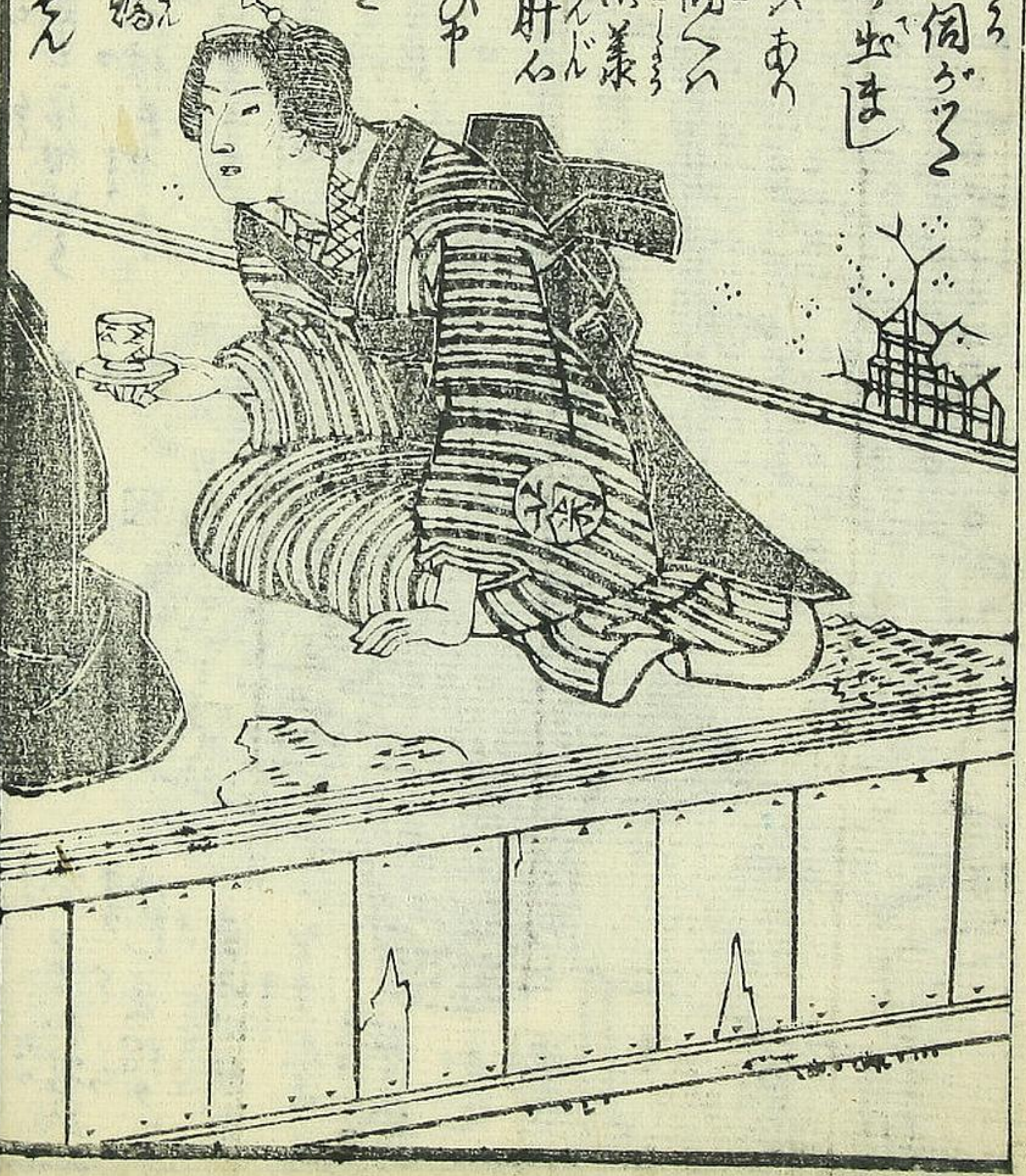
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

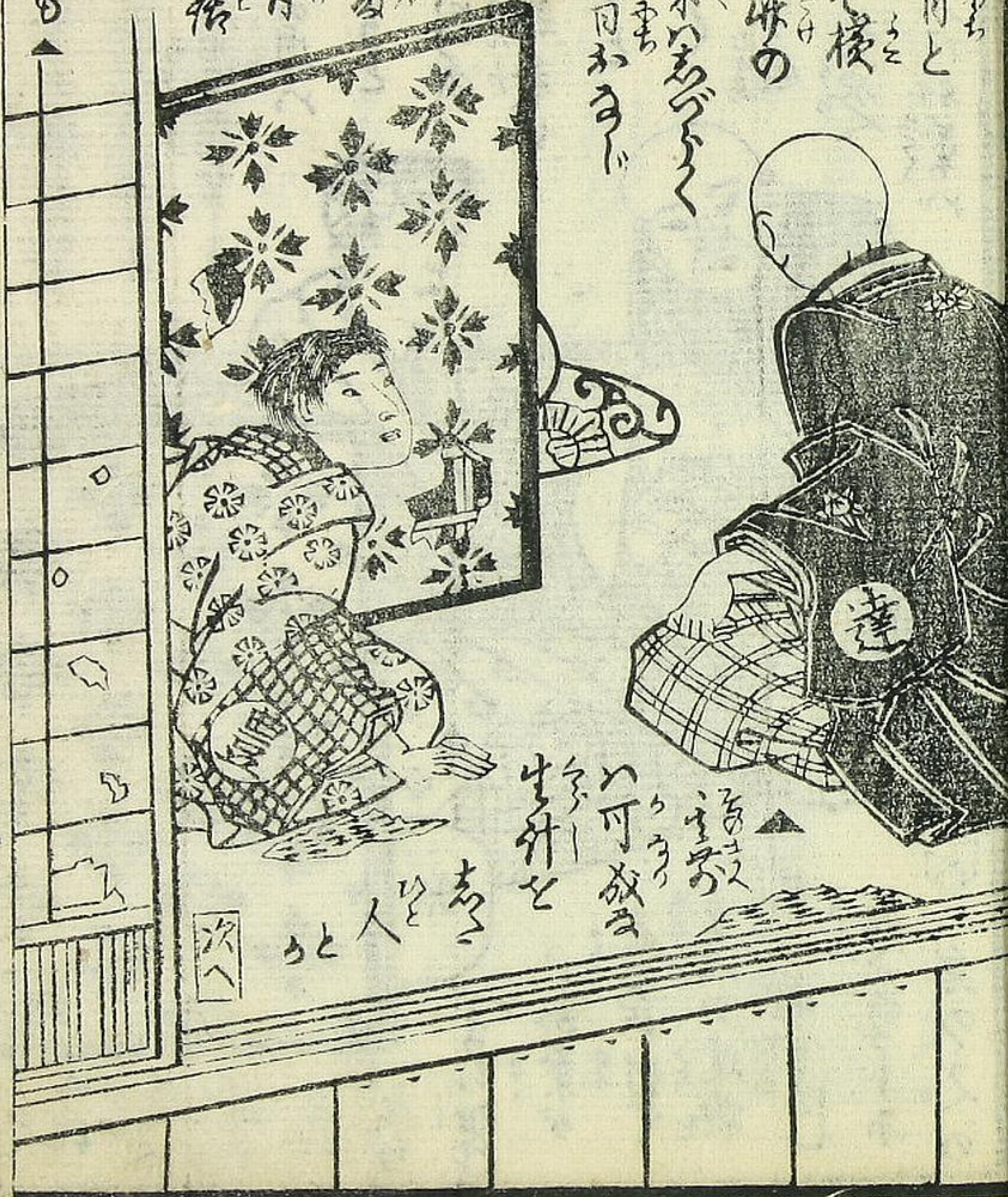
とあつてあつてあつて
とあつてあつてあつて
とあつてあつてあつて

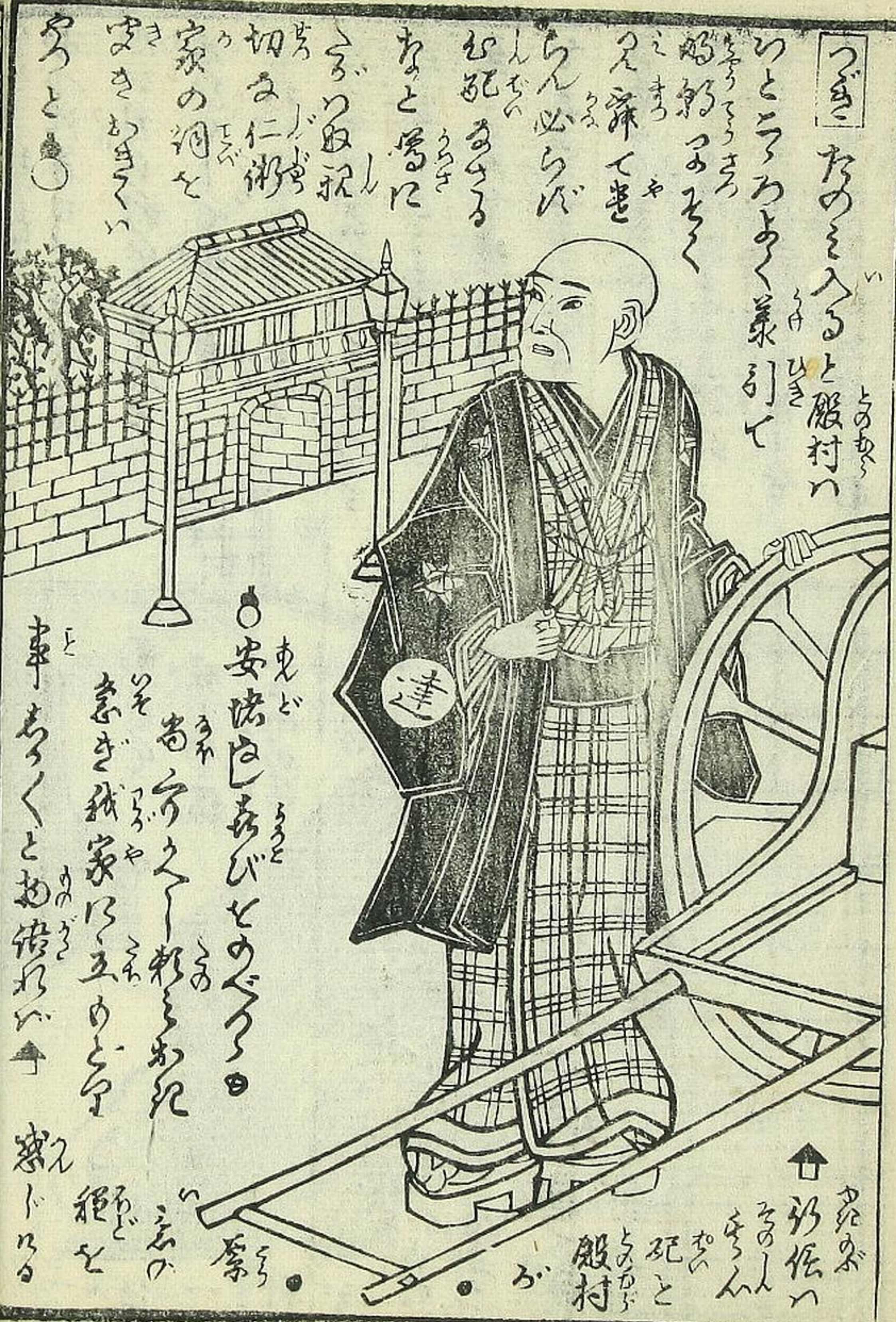
つぎ 女うら 伺う
と申して 松うら 出は
て おお へん へん

ます まへうと 伺ふ
お母の 息が 水養
知る ぶら 子の 肝心
松より おお 申し
て へん へん 申し
ゆふ ぬま じ
一寸と ひとと へん
あや ぬま へん へん
その ひま せう せん



あふの ぬま の 月と
別を と 告げ 候
町へ 申す お母の
後 終を 茶の へん
へん へん へん へん
仕事 場へ
と 申す 人の
あや ぬま へん
まの 中へ へん
あや ぬま へん
て 親 へん へん
と 申す へん
那の おお へん





つぎ ちのこ入ると般村の
 のところろろく兼引て
 船船つるまろく
 んん必らば
 んん必らば
 んん必らば
 んん必らば

安法はあびどのぐろ
 あふくくろろろろろ
 あふくくろろろろろ
 あふくくろろろろろ
 あふくくろろろろろ
 あふくくろろろろろ
 あふくくろろろろろ
 あふくくろろろろろ

般村
 般村
 般村
 般村
 般村
 般村
 般村
 般村

荒磯割烹鯉魚腸 五編 久保田彦著作
 名八代目團十郎のはさし
 守川周重画

籬の菊探鏡 三編
 孟奔考虎画
 守川周重画
 金花胡蝶 三編
 守川周重画

冬見立闇鳩 三編
 守川周重画
 藻塩草近世奇談 三編
 孟奔考虎画

舎 錦繪問屋
 日本橋區兩國吉川町五番地
 青盛堂
 加賀屋
 堤 吉兵衛

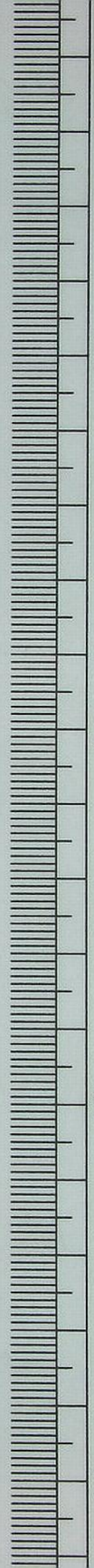




櫻齋房種画

加賀吉梓

下之巻



10

15

20

25

ゆきのさしほ

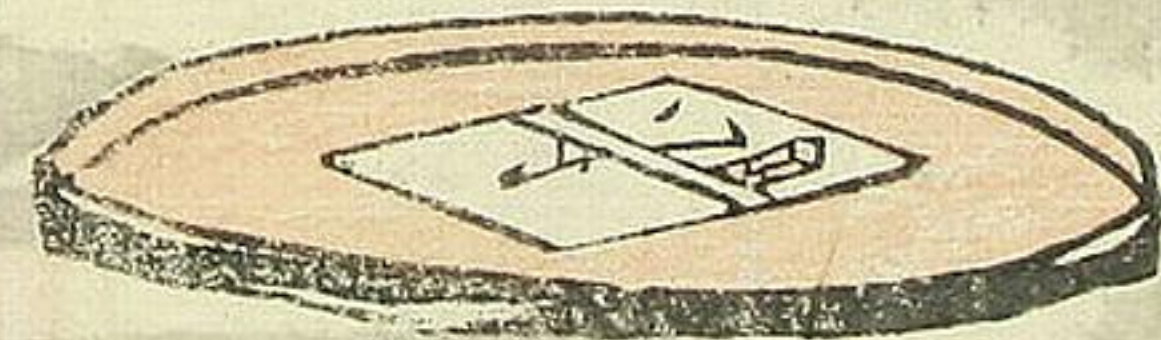
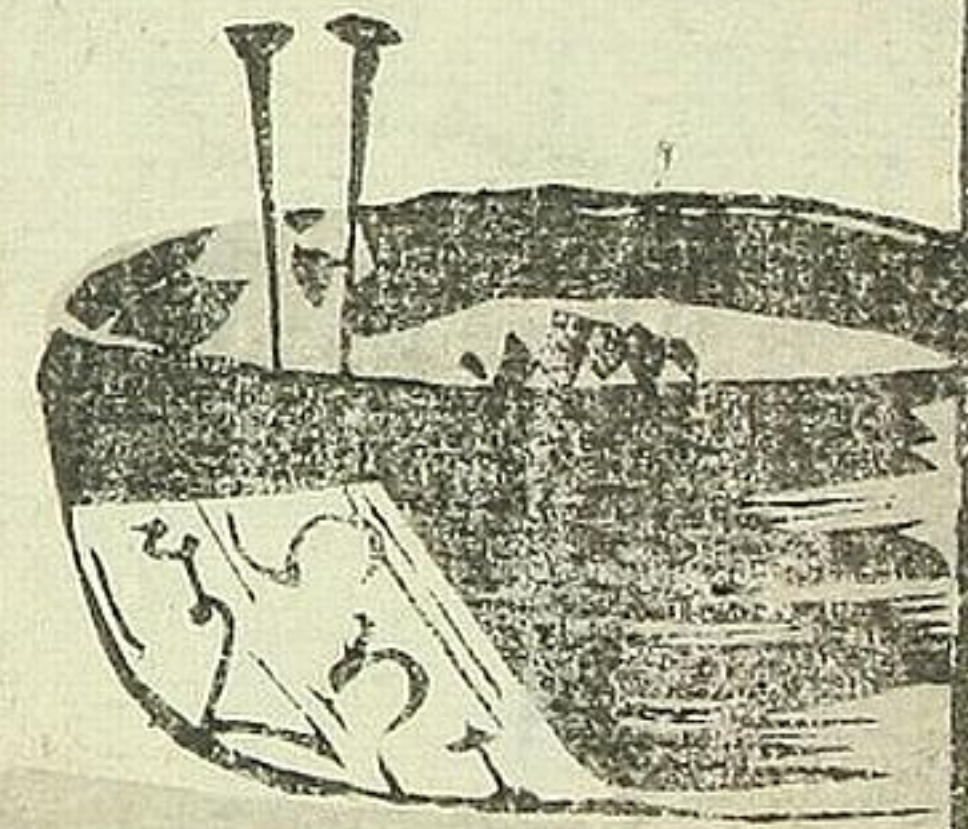
炭九

ゆきえん

文系つる 下の巻

なご心志

かゝる梓



<48-8365>



○相羽
まじら殿村
人力車

▲天竺山

ゆきのさしほ

なご心志

かゝる梓

ゆきのさしほ
炭九
ゆきえん
文系つる
下の巻
なご心志

ゆきのさしほ
炭九
ゆきえん
文系つる
下の巻
なご心志

☒ 手紙

☒ 手紙

☒ 手紙

ゆきのさしほ
炭九
ゆきえん
文系つる
下の巻
なご心志

丹桂(にんけい)はあつたふと今(いま)も
 の糸(いと)は波(なみ)の如(ごと)く快(か)く
 舞(ま)うとん保(たも)つたふ
 大(おほ)いなる酒(さけ)が
 長く看(み)る病(びょう)が
 高(たか)きとく小(こ)湊(みなと)
 何(なに)れ又(また)道(みち)田(で)にあ(あ)え
 舞(ま)い

〇(まる)きまのり(きまのり)は丹(にん)桂(けい)を
 小(こ)さげぬ
 何(なに)とそらつてま
 舞(ま)い

〇(まる)あれと
 〇(まる)相(あ)合(あ)ひに
 〇(まる)茶(ち)の効(き)効(き)と
 〇(まる)丹(にん)桂(けい)が丹(にん)桂(けい)
 〇(まる)の道(みち)とええ
 〇(まる)茶(ち)の効(き)効(き)と
 〇(まる)丹(にん)桂(けい)が丹(にん)桂(けい)
 〇(まる)の道(みち)とええ





鬼小僧 家まき
 遠付んと
 お南の帯
 七引大念
 励ま三三三
 申すも
 足はめめ又も
 つまみ
 実上る痛さ
 小娘らへまき
 果ハ大蛇へ踊るも
 かのりへまき
 始おまきか
 空後く取て

三
 三
 三



つきぬる
 途巾足
 買物と
 先之ぬ脊負て
 あらまて
 激せて
 名は除月
 繁る腹痛の
 一々味

〇月を
 潮くみ
 付が
 男の
 十二
 一
 せ
 生
 春

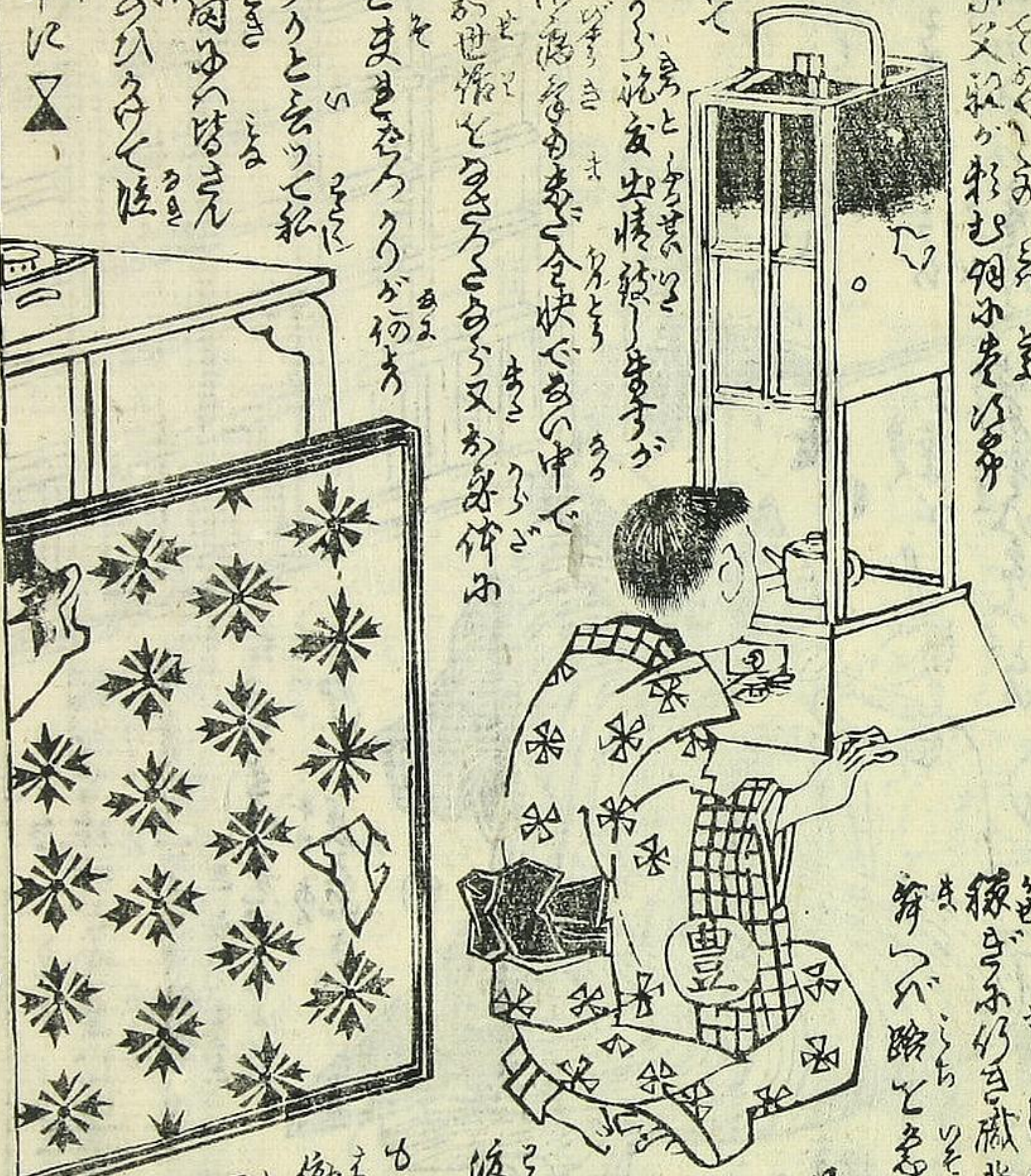
三
 三
 三

夫て人の身のみならず如何に事
 たるんが半半銀りの中まの大病今まの大小の
 縁入の事と病つたる事とより人産婦とありて一
 夫向の生尚惑へたる人方多く終りとて毎日
 歎けども病つたる縁と事多し今今の方
 一個の縁ぎと一家五人の就子の
 のが杖柱ともあつたれば
 幸猶もゆくぬれと捕一
 分程交れとせし
 就と帳も由は
 堪忍して相らふは商
 致へども縁が不仕て是れと



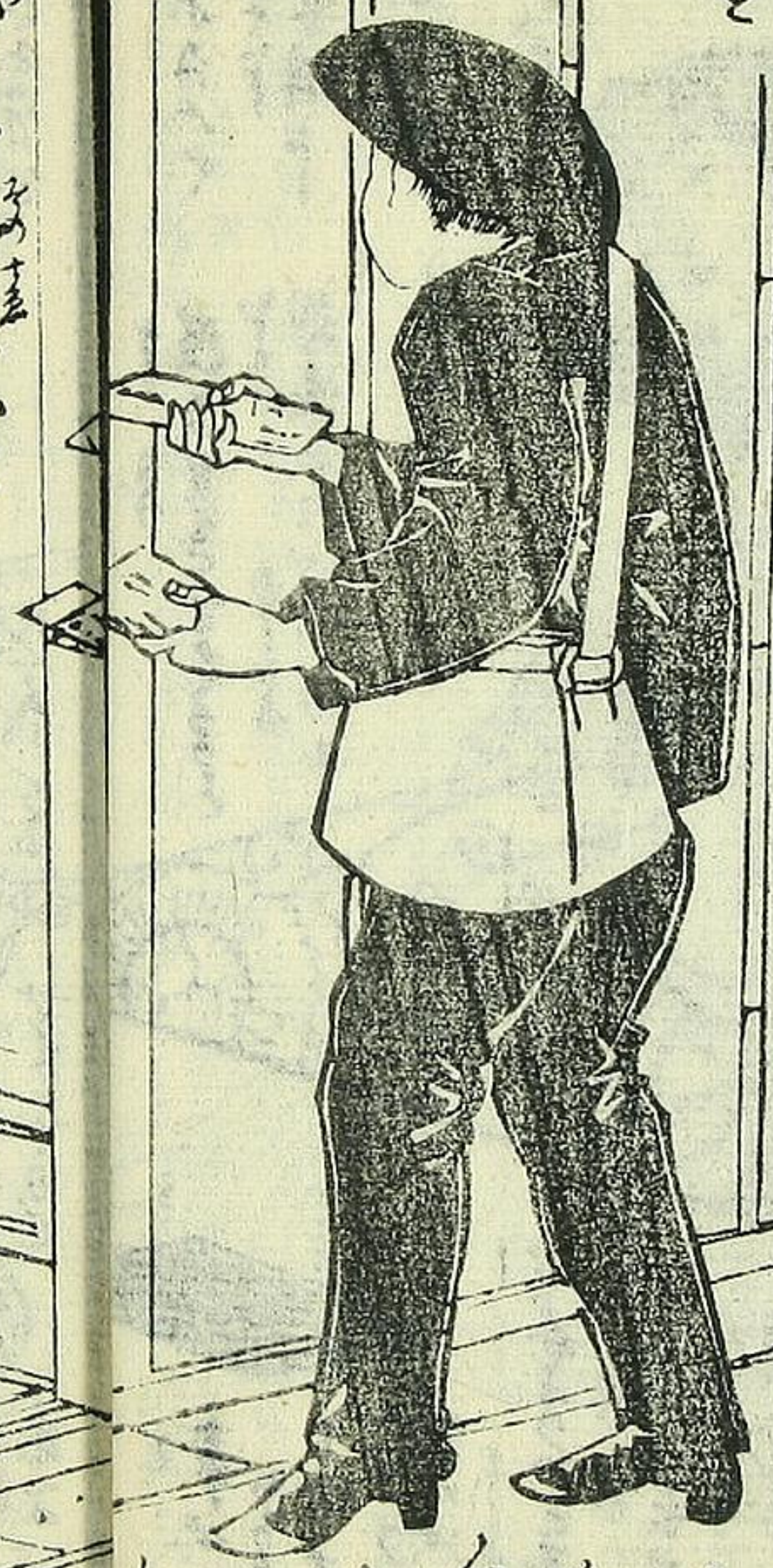
似るが次第は
 かの方中
 死する心
 の惨劇と
 安んずる父の
 仍依由何と
 慰む方多く
 涙息はて七病
 たりしが世に多
 子供はまとは
 定めては
 子、起出高致へ

海から父親が起り相おき
 まへ疾
 母さん
 云付られた
 長り末うと泣き出情結し
 父さんの御病を
 糸の世帯を
 藤のうとまき
 心死さうりと云つて私
 が此方の内
 かと泣き
 沈む事

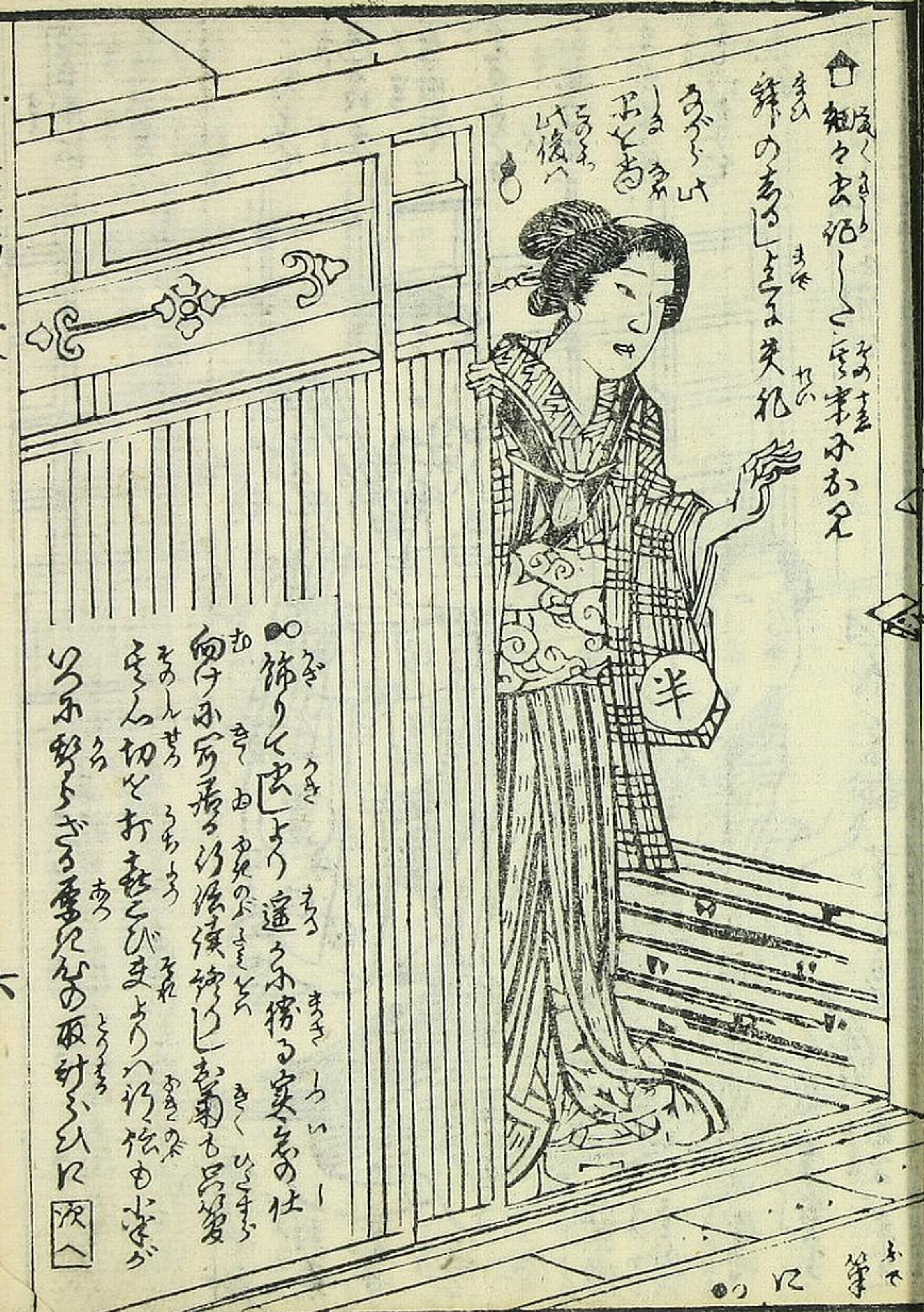


縁が不仕て是れと
 幾干あ
 父小
 後、休息
 かせ
 徹くせえ
 可道辺
 の人

つぎ 既脱後今般の病字の形勢と委後文お惚めく
 〇月とふか 某料の足
 急ぎ郵便で出してくれおしくとつらあつく急返む様と
 おもとと四つゝの梅
 不審と思ふと思やうのく迷らふ乃胆とお業の公お勅ま
 にはあふくし
 船どのがふまふくを海流せたる境をどと去加へて差返
 小舟よりとあひ
 十日程控て小舟の許より返りが事こお様にお業様を
 色んで十四日
 長人の控えをて封押開て後下流お様病字の足辨より
 ありと返
 か業のむ若と
 返りて



くさ
 知由
 人の
 大と
 ちと



細くお惚しとてお業おおえ
 辨のあふしよまふれ

あふりけ
 正と書
 け後へ

飾りて出より遠くお務る実名お仕
 向け小舟番の法儀候にむ菊も只後
 せん切や打おとびまよりハ行松由小舟が
 小舟勢とざる要はなぬ取針ふ以に

つぎ 漱石の自叙傳の毎日巻末の通りの
 冬見立と連立茶焙場(感業)
 小笠原家(石室)長男と始末伝
 冬見立も夜更と多習抄と並
 冬見立も夜更と多習抄と並
 冬見立も夜更と多習抄と並
 冬見立も夜更と多習抄と並

文京綴
 房種画



明治十三年十月十二日御届
 日本橋区塚町八番地
 編輯人 渡辺 茂方
 目録米沢町一丁目七番地
 出版人 堤 吉兵衛

荒磯割烹鯉魚腸 五編 久保田彦作著
 名八代目團十郎のはまじし 守川周重画

離の菊探鏡 三編 三切
 渡辺文京綴 守川周重画

冬見立閣鴉 三編 三切
 藤田仙果作 守川周重画
 藻塩草近世海談 三編 三切
 孟奇芳虎画

舎 地本問屋
 錦繪問屋
 日本橋區西國吉川町五番地
 青盛堂 加賀屋 堤 吉兵衛

